

平成 25 年度「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」
共同利用型に係る研究成果報告書

報告者：安達大輔

研究課題名：ロシア・ロマン主義文学と同時代のバレエにおける身振り表現の
比較

この研究の目的は、まずロシア・ロマン主義の時代に、言語を表現手段として用いないバレエの身振りが何を表現すると考えられていたのかを明らかにすること。次に、こうした言説を文学作品におけるバレエやダンスの言語化の諸相と比較することだった。報告者は将来的に、近代ロシア文学における身振り言語の問題を総合的に考察する計画を立てている。この研究はそのための手がかりを得、足場を固める段階にあたり、資料収集が中心となった。

スラブ研究センター（現ユーラシア・スラブ研究センター、以下「センター」と略）には、2013年9月2-4日、2014年2月24-28日の2回にわたって滞在する機会をいただいた。滞在中は、一次文献として *Вестник Европы*（『ヨーロッパ通報』）、*Москвитянин*（『モスクワ人』）など19世紀前半の雑誌のマイクロ資料を利用して当時の批評にあたるとともに、バレエ・ダンス描写のある文学テキストを集めた。また二次文献として、18・19世紀のロシアおよびヨーロッパにおけるバレエと身振り言語の関係を論じた文献、および当時の文学に見られるバレエ・ダンス描写の研究を参照した。そのさい、北海道大学図書館の電子ジャーナルを通じて学術誌に簡単にアクセスすることができ、それによってとくに英語圏の最新の研究成果について知見を更新できた。

センターに研究滞在する魅力として、図書館に所蔵されているスラブ・ユーラシア地域の資料の充実ぶりとともに、関連する多様な分野の研究者との交流があげられる。今回も、センター野町准教授のご配慮により、2014年2月27日に「見えないものを見る？：ゴゴリの文学とイメージ」と題する報告を北海道スラブ研究会でおこなう機会をいただいた。さらに同26日にはユーラシア表象研究会での佐藤亮太郎氏の報告、28日には本田晃子研究員のセミナー報告に参加して、生産的な意見交換をかわすことができた。

今回の研究によって、近代ロシア文学における言語と身振りの関係を総合的に考察するための重要な第一歩を踏み出すことができた。いつもながら快適な研究滞在を支えてくださったセンターの研究スタッフ、図書館スタッフ、事務スタッフ、学生の方々には、心から感謝を申し上げます。